

教育長賞

清らかな水、尊い水

静岡市内中学校

一年 西ヶ谷 さん

私の住む、静岡市清水区には、興津川という清流が流れています。毎年鮎釣りの季節になると、釣り人だけでなく、釣り人の姿を見るために、川沿いの遊歩道には人が集まります。鮎はきれいな川でしか育つことができないため、まさに清流の象徴で、興津川は私の住む町の自慢の一つです。しかし、昨年九月、静岡県を台風十五号がおそいました。夜遅くから降り続く強い雨は、やむことなく警報が何度も繰り返されました。眠れない夜が明け、外を少し歩くと、町中に大きな被害がもたらされていました。曾祖父母のお墓の裏山が崩れ落ちている。冠水した道路、どこから流れてきた大きなゴミが散乱している。動けなくなった車には、くつきりと茶色い泥がついていて、信じられない高さまで水があがってきていたのだということがわかりました。また興津川も美しかった姿は消え、茶色い水が勢いよく流れる恐ろしい姿になっていました。遊歩道は流れ着いた土砂と大木が押し寄せ、フェンスが曲がってしまっていました。

断水になることを知らせる広報静岡が流れるとまもなく、蛇口から水が出なくなってしまうました。興津川の取水口に土砂が流れ込み、取水できなくなってしまったのです。そして、道路が寸断され、土砂が家を飲み込んだ地域、家や生活に必要な物を失った方がたくさんいることが次々と

わかり、これはただごとではない、と不安になりました。

JRは運休、車は通行止めとなり、私たちの周りのスパー、コンビニから一瞬で水がなくなりました。汗をかいてもお風呂にも入ることができません。トイレの水を流すこともできませんでした。

一晚経ち給水車が来てくれることになりました、という連絡を当時組合の班長だった母が家々に走って知らせていました。しかし、給水を待つ列は、四時間待ちです。こんなに水を手に入れることが難しいなんて。今まで当たり前のように蛇口から出てきた水がこんなに貴重なものだなんて、気づきもしませんでした。不安は募るばかりです。

そんな中、「井戸水あります。使ってください。」段ボールに書かれた手作りの看板が、あちらこちらに出始めました。また、両親のところには、「大丈夫。水送るよ。」や「今からお水届けに行くからね。」と遠いところから、ニュースを知り、荷物を送ってくれる人、車で届けてくれる人の存在がいました。看板を見るたびに。母が「ありがたいね。」と話をするたびに。私の周りのあたたかさを感じ、勇気が出ました。また、給水車は日に日に台数が増え、全国から来てくださる給水車の多さに、不安だった水の存在は、感謝の水に変わりました。

驚いたのは、母が「まだ私たちより困っている人がいる

から。」と届けてもらったお水を、重い水を運べずに困っている人のところに運んでいったことです。「何かできることはあるかな。」自分たちもたくさん助けてもらいました。その感謝の水は、気持ちのをせて、めぐる水になりました。久しぶりに蛇口から水が出た日、トイレの水を流すことができた日。水ってこんなに勢いよく流れていたのだ。慌てて蛇口をしめました。

しばらくは茶色く濁ったままの興津川がやっと元の美しい川の色に戻りました。こんなに美しい川の様子も今までとは少し違います。むき出しの斜面がそのままの状態の場所もいくつもあります。流木や土砂が流れ着いたままの場所もあります。それを見るたびに、あの日を思い出します。いつまでもこの清らかな水を守るように自然を大切にしたいです。そして、尊い水の存在と、この経験を無駄にしないように生活していきたいと思えます。